

## ルカ 10 章、あるいは「ミニストリーをどのように愛によって進めるか」

2010 年 3 月 14 日 アシェル・イントレーター

ルカ 10 章で、イエシュアは愛について小さいながら三つ語られました。25 節から 28 節にかけて、ある律法学者にモーセの律法の中心的な原則は宗教的な儀式ではなく愛であると説明されました。まず神を愛し、次に互いに愛し合いなさいと。

その律法学者はどのようにしたら永遠のいのちを得られるか質問しました。イエシュアは、ご自身がメシアであるから私を信じよとはおっしゃいませんでしたが、むしろ律法には何と書いてあるかと尋ねました。律法学者がその答えを出したのです。(この答えは第一世紀のラビ・ヒレル学派に認められる立場と類似しています。)

**ルカ 10:27:すると彼は答えて言った。「『心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くし、知性を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』また『あなたの隣人をあなた自身の ように愛せよ。』とあります。」**

イエシュアはその律法学者に、律法の意味について正しく答えていると同意し、さらにこの二つの「愛」の命令は永遠のいのちへと続くものだと言われました。ああ、しかし適用が問題なのです。イエシュアの時代のパリサイ人が偽善であると見なすのは簡単です。しかし私たちも同じ問題に直面しています。イエシュアは彼らのことだけを語られたのではありません。主は私たちのことも語っておられるのです。

これら二つの基本的な律法—神を愛し、私たちの隣人を愛するということは、単純です。しかしなぜ私たちは簡単にそれを台無しにしてしまうのでしょうか。イエシュアは二つの例を挙げています。最初の誤りは神を愛することで、もう一方の誤りは私たちの隣人を愛することです。これらの例は私たち全員に適用されるもので、特に「ミニストリー」で奉仕する人々、とりわけ「ミニストリーの指導者たち」はそうです。

最初の例—良きサマリヤ人において、ミニストリーに携わる指導者が、彼の隣人を愛するという原則を見失うことを示しています。ミニストリーの指導者たち(祭司やレビ人)は自分のミニストリー、彼らの祭司としての召命の重要性、「神に奉仕する」という事にあまりにも集中しており、この傷ついた、助けを必要とする「低い優先順位」である人を助ける尽力や時間を無駄にできないのです。

二番目の例、すなわちマルタですが、ミニストリーの責任を負う人が神を愛するという原則を見失うことを示しています。マルタはイエシュアの最も近い弟子の一人ですが、最も責任感があり、一生懸命働く人でした。彼女は自分の責務にあまりにも没頭してしまい、主を愛する機会を逸してしまったのです。彼女はまた姉妹のマリアに対して気分をそこねてしまいました。彼女の奉仕が愛とすり替

わってしまったのです(黙示録 2:4)。

マルタやサマリア人から学び、神を愛し隣人を愛することを最優先にしようではありませんか。